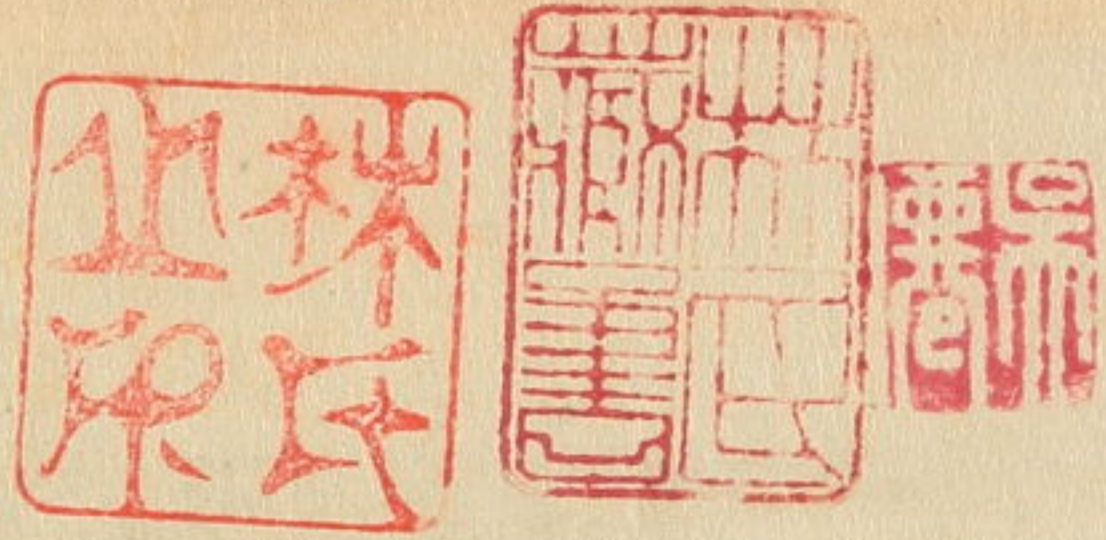




萬古青春

張尾 梅樹軒逸人



張尾 梅樹軒逸人
思永堂
主人
價亦換之
漢籍を弄
子
傳ハ梅樹軒小胡座

執捨自在の誑諧亦
朋友をまじりて朋不依
とせば又至_レ諧と名
つて_二也_一筆_レ紙_レ且の
たふ階_レ日_レ即_レ乙_レ其_レ昂_レの_二子
あ_レ已_レ記憶_レす_レれ_レて

見_レ仰_レの_レ句_一一千余吟を
誑_レる_レ其_レ中_レ不_レた_レ誑_レ止_レり
_レ依_レ句_一を_レ書_レ集_レると
云_レハ_レ重_レ人_レ答_レて_レ曰_レ美_レ古
昔_レ日_レ春_レ茲_レ紙_レ名_レと_レ書_レ依

快臺



梅の香はこぼれ

逸人



かめりてと朝の春

桜花見とれ

耳り

暮乃鐘

乙卯年

乙卯

朝風の少年

陸田良

起る母は子也



鶯の飛

ちかみの梅柳

女
さこと

諸鳥能

殺身美名守禮

忘今朝乃春

怯喜臺

癸酉孟春製表於
尾陽梅樹軒小窓

雪菴居士



逸人
と朝春



か
め
て
さ
え
ら
し
ま
し
ま
し
ま
し



朝春
書

釣殿や睡も一と寐惚し

朝臺

おぼろし〜花の只中

逸人

菟菟〜れめほひの踏を扱て

朝臺

か〜箭反南に旗鼓た〜き

逸人

白〜〜舟〜ゆめ〜一位〜

朝臺

世界れ家坂のや〜草花戸

逸人

花葉の如くはるかに春三葉の如く
収臺

菊

万葉の香はるもよからぬし
収臺

よや盛の葉はるかに電の如
遠人

柳

昔柳の糸はるかに春の如く
遠人

眼はるかに春の如くはるかに
収臺

雉子

まはるかに春の如くはるかに
遠人

⁵⁰ 何れも春の如くはるかに
収臺

田螺

蛤を養ふ田螺はるかに
遠人

木曾人の田螺をるかに
収臺



故をれはるかに春の如く
遠人

まの如くはるかに春の如く
収臺

沈より田螺のふもろくもよとちん
 酒のりさくはくしあゝる勝
 草の家のけりけりもよる
 何き申よの浦の後とあ
 晴細とやうとちん井紫
 60 磯家のくさくさあか鐘
 意しとく強強とく書し
 師を二十とくさくさく
 也實 遠人 吾舟 一瓢 誤鹿 也實

70

四より半鐘くぬくもよとちん
 多 東尔風雨く婦一久
 ちの晴れ初あゝるもよ
 輪の海をくさくさあか
 ちやくもあかあか初あ
 波よりつらゝく 燧とく本し
 梅より今貴へのあかす
 ちの海よりよあかす
 一瓢 香舟 一瓢 也實 遠人 吾舟 一瓢 誤鹿 也實

海苔捲平の事いふはなほ
 也實
 魚根の尻入を道へんまじ
 曾活
 鶏の城平啼はれは道へ
 道人
 江口につゝあまき一石
 懐臺
 四の車は茶をゆめをまじ
 一瓢
 蟹巻自とて誰か
 范舎
 高水平らうも軍の海へ
 曾活
 實盛したる聲は沈き
 道人

糸巻子たつゝ花標
 懐臺
 のつとらるる夏の夕月
 小
 舟のつと日赤らう思田子舟
 范舎
 世とせりつと路のつと世無ら
 一瓢
 黙つとつと名もつとつと
 道人
 鶯鳴つとつとつとつと
 曾活
 とつとつとつとつとつと
 小
 高水平を内表百姓
 范舎

花市のふりしるし
一瓢
一瓢



六重のさくら
吾舟

90 雪のふりしるし
也實

春のたけのこ
嵯鹿

一重のさくら
一瓢

さくら
范舎

ついでに
榎居

くさくさ
收臺

食ふは
道人

行の
女

雛子
桂岳

梅
竹舟

100 の
書

史
杜々

わらわの 花梅の園ありきと
馬人
心もあやめあり蝶のりふ
杜農

120 春のまはさるるのきり
踏池

二日しほし初あり梅の花
大道

昔よあはれ蝶の羽ひや袖多き
始鳥

若菜も橋をわたりておまへり
巴曉

梅のうらやまやあやもをり空
李朋

草くくやきとくのひの
有磯

厂鳴乃もまらるる春のうみ
湖有

花鳴く雲のうらやまは
紫琴

梅のまはるや山家も梅さる家
野秀

雪乃あはれ梅のうらやま
可波

130 鶴 庭のうらやまも新しき
戸菱

梅のうらやまもあはれ梅さる家
柏亭

はるのまはるもうらやまも
寄流

梅のうらやまもあはれ梅さる家
遠旨

昔よゆは時あし日か 一 吉良

史柳うえそをさき山夕新 知夕

夜あふりうきまを伏見根 如芝

らの上や内れ葬の一は美 平秋

つう茶せよ初きれ奥山家 風磨

知くや身売さしは柳乃花 曾洛

¹⁴⁰昔やさしうきみの書ついで 一茶

あはあふまきしは是の角屋敷 双巴

葉のむら葉のむらきみ一は秋夜 保

葉織りまはるよはまはるのる 野火

昔露や浮夜ハ月の有 露 調

うきうきや浮きを電れ一のり 士 精

湖や一夜中くく唇の聲 馬 迹

柳柳何所かえ内いのるさし 湖 邊

花の甲よりまはつりうきまはる 武 磨

娘奴らや家を記し一は 月 約

種もやちほろれ中に啼田螺

至方

鳥よほのく人動る山をよむ

松葉

春もるる喜やふさるるを植しを

岫山

月も日も丸くちのふらふらく

松後

梅のけしきちりの戸を戸せ

深谷

月雲や母先ハ新波の男たそ

七友

唇のゆらやまのこひを

英雀

たそよに啼ても梅の匂しう那

湖上

うつくしきく名のちきとも木の香が

六車

鳥の巣中 櫻吹かやうし

拾香

よみにうつくしきくうきの匂し

春宇

おきおきまに人かゝり温禊像

少女

夕くれの空かゝり梅乃ち家

駕風

室に春をさくし舞をさるる子日

阿城

とくぬや神筆をゆきし香の月

竹堂

旅人をよみせし若葉を吹散す

湖等

まのつらきもあつちのりや海苔の砂 意遠

雲くくくく日ハ入也 里桐

高砂のまの紫橋あやりのまの 粟大

橋まゝ自慢の子や若菜は 佳長

170 雉子伝ふく松もほろくれ西日か 葛井

嘆くくこの者かゝるる唐の花 偷草

そやう矢れあゝハ鶴をま 秋国

柳くく一雪あれや如子き 允門

雪に何れやあゝ思ひさう 白水

ついであに梅のまの月ハさう 文至

くく若や蛤さうほろみゆい 角肥

まのりの水をさしめくあや 梅尻

青柳やまの伝まよて年れ 芦雪

明のまき行一月千本ねうさ 梅尔

180 少伏うのまのついでくねいさ 鱧子

若菜ついで春中に負しあやが 知南

あゝ櫻さくしむあゝ日暮るる家
公陸

若草あやしくまはきのふのつらき
宗虎

ひとくは似合しうし守梅の花
魚妻

さへつゝつらき春を
根雀

新しき哉ちげ足色をう夜の雨
花園

柳ハ生涯相屋を伝へ

楠乃つくりの枝ふせえのむ
猶子

人ハ皆あつり魚あゝせういふを
春年

雪の上に松ハ新あり梅も花
梅向

190 春の夜や竹のまもあき松の室
鹿野

らんう井とつし思ふのふ
可竹

まのうぢらあゝ一さき標の花
竹頼

水もあやしく金をめかいつを
末己

まゐるふもねく日のあゝ塘うま
午風

短きなやみゆのさひのさき垣
芳水

最ふしうけつさき梅の葉
梅葉

若柳や花のさくらとよしの裾 秋層

赤らぬ風をいそぐ山 竹方

海やうらみええの初日影 木天

200 誰かゝる新しううまの花 不結

心桃や枝の風を 吹 葵 風蕉

春五や風をいそぐ二木松 舎童

る乃のうまへの春平 度雅

草橋より都界乃のうま 丘園

元月やる雪のまじり 鮎丸

雛子よききりしはれ松の月 子朴

古里や梅をいそぐ 緑野

足るやれし水の水の口 谷竹

瀧をいそぐ音のうらみ鳥 巨流

210 里れ子のなまのり 月皎

うらむけはらけの月 月舞

豊かきもの 月舞 收臺

○

千載

ほろみみゆ井戸白田麦草之思

静ろや野梅乃ん笑れく春の

愛えり益稜の新長茅草

○

松風

子の日とく不吉物之市女

蝶れとろくぬ花色此油

よ風博代乃春多し心家宿

遠人
收臺

遠人
收臺

余興混雑之部

夕暮や舟の端を提ちりて 几丈

²²⁰ 乃くわぬ思えく妻の針 几長

拍子ゆゆゆと歌の御もて 遠人

藤のたけ也伝友太くぬれ草鞋 花弁

夕顔やこけり曾れ垣の中 也實

あまのうらみもいふかき海をこらふ
吾舟

卯能もあや梅よ一ゆきのをさる
花舎

雪のつらけ月よきさる枯尾花
伎臺

松の美さつらさる道はまの御も
巨峯

雪の音もせりくさるさるまを
隆四郎

あまの鳥石のふらりくさる
火之録

230 夏腐切や口さるふれまゆり秋
春屋

念佛と酒の音と鐘もくさる
峯鹿

中切ふゆくさるの井れき見らふ
乙丑郎

今月の秋もいおももかりり亀
隆四郎

松の音とくさるさるさる
棟居

涼くさる思ひつらるけり
伎臺

雪の音のゆきかきさる落し水
雨橋

西のうらやまの紫のゆり衣配
儿丈

月よあまのつらけさる浦伝ひ
至方

種のもかきみよゆり
志月

誰かあつらんきく音原瀬田の橋 巨峯

まのこゝの別はせや古むら 角肥

あふらまはりぬきやまに鳴る木 梅山

うら〜と鳥さりのれ雲もさき 芦屋

260 蝶もあつらん秋の終 杉後

あつらんも生れあつらん京の冬 六車

鳴るや水よせぬぬ敷乃新 杜農

鳥も喰りぬ〜鳴る秋の終 几長

くす雲に〜ぬる音松きあつらんが 眠屋

秋の月ややみほひ〜とまのあ 乙丑年 乙丑節

まのり水打流〜もさや四月新 一瓢

枝のきれたのう風も吹ぬらう新 千武

蕨菜のふおさほ〜くおハ蛇〜 次女

名力や瀬田ハ〜の橋 橋寺さぬし 也實

270 湖のうへ降雪れ力夜〜の終 松葉

まのり〜ハ風平秋〜まのあ 岬山

若叶尔もや夕暮の景青く如
平秋

名月や故人さよ〜情も
大模

²⁹⁰ 増寛のちや〜さか中を
即芝

をさ〜く〜鮭魚し濱の
大道

あ〜さか站よりぬ〜の浦
文三

幸崎や薫ら〜あり秋の月
始鳥

松ふ〜や十六夜の間有〜
野秀

月涼〜誰も〜其のほ〜川舟
五道

〜我も〜福〜〜定〜か〜し〜馬
馬人

砂濱や人ふ〜たれ〜つ〜れ〜あり
花舟

尺五〜や白蛇〜なる〜草の庵
儿文

敷き〜し〜ち〜や〜裾に〜垂〜る〜松
眠屋

³⁰⁰ 却〜〜〜葉の端〜〜信〜
楳若

³⁰¹ 夕〜〜〜中〜〜を〜〜費〜〜ひ〜ら〜
儿長

中〜〜の〜〜交〜〜は〜〜く〜
春屋

ね〜〜〜〜廿八〜〜年〜
千武

人の憂れ詠ありしに枯野哉

雨橋

月もや茶乃花垣にむら雀

文至

迷半一芦の枯半を今月れ雪

五道

水辺乃畠も老也あまもり

平秋

紫野草の心もや名も穴

一瓢

去れ行あもや其れ蠟乃を

梅間

掃切も冬至乃朝日待よき

鹿野

昔もみち 弦ひ合也十園子

双巴

有明ハ多入落し白牡丹

舎童

梅もやまの峰 跡の雪れを

丘園

暁やしらに初風也きん

梅居

一しられしもなま三月の月

女年 平夜亭

夕の海もきのよれやあ時るか

女年 月海

西もや舞く花もらに音わす

女年 雀磨

名月やうあなもあよの歌

末天

柳小ほきしやうにうぬ井月

石鏡

人声は柳のあはれをきき
 走りゆくを思ふあはれを
 梅の香をきき思ふあはれを
 流るる水もあはれをきき
 柳園 一器

雪意陳人 相

名月也

黙々

原野の人

之句

道人



永八五子

若くは

のり

まを

のり

少年

陸田



子海子や

両志

のり

合歌のふ

少年

乙丑



雀巣

そも

のり

秋の月

情臺



大和文化萬年之十年歲
在癸酉春正月朔旦

紫雲閣人快臺
梅樹軒道人

同輯



